

博 士 論 文 要 旨

報告番号	第 乙 1 号	氏 名	栗原 保子
論文題目	看護学生の自己評価能力向上のための ネットワーク型CAI<学習支援システム>の開発に関する研究		
<p>keywords: CAIシステム, ネットワーク, 看護技術論, 自己評価能力, 学習支援</p> <p>本研究の目的は、開発した看護学生の自己評価能力向上のためのネットワーク型CAI<学習支援システム>について、看護技術教育における教育方法としての有用性を明らかにすることである。</p> <p>研究対象は、ネットワーク型CAI<学習支援システム>の初期構想から完成に至る過程を開発過程とし、その開発に直接携わった研究者である看護教員の位置から再構成された構築過程及び、本システムを活用した教育実践とその評価、とした。データ収集については、システムの初期構想から完成に至る過程の全体像を押さえるために、既存の資料や当時のメモを収集した。それらの資料を経年的に概観し、システム構築ごとに類別して基礎資料とした。次に、看護教員が各システムの完成と捉えた時を転換点として、基礎資料をもとに、システム毎に<ねらい><構築過程><システムを活用した教育実践とその評価>から再構成した。各システムの教育実践評価をもとに、教育システムの中核となる看護観とその表現技術の連関に焦点をあててシステムの有用性を分析し、看護実践能力の向上に不可欠な自己評価能力の育成との関連で考察を深めた結果、以下の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ネットワーク型CAI<学習支援システム>は、看護実践能力の向上を目指す看護技術論及び看護技術教育論とその教育システムを前提に、その目的性に貫かれたシステム構築である。 2. 本システムは、学生個々の看護基本技術の修得段階に応じた学習を可能にしている。 3. 本システムは、学生が看護基本技術の現象像を、その立体像とのつながりで描くことにおいて有用である。そして、その過程においては、既習事項を想起させ(知識の定着)次の学習活動を誘導している。 4. 本システムは、学生が自己の看護基本技術の到達度について、学習過程の全体像を押さえ、自己評価に順序性をもちつつ問いかけて的に評価することを可能にしている。しかし、評価は改善のための情報であるという意識を強化し、システムの活用を推し進めていく必要がある。 5. 自己モデリング(自己の客体化)は、表現技術(自己の看護者としての行為)をとおして、その行為や受けてからの反応といった部分で評価するのではなく、その行為の意味を看護観とその表現技術の連関で自己評価することを可能にし、より自己客観視を促している。そして、感性的認識から理性的認識への結びつき・移行を可能にしている。 6. 本システムは、看護観とその表現技術の連関を中核にして、学生の看護技術の修得過程を、各システムが相互に補完し合い支援している。すなわち、学生の看護技術の修得過程において、VODシステムは看護観の形成に着目してその強化を支援しており、自己評価システム及び自己評価能力向上支援システムは表現技術に着目してその行為の意味を看護観との連関で自己評価することを促している。これらのことから、本システムの全体像と各システムの関連性を表すシステム概念図を作成することができた。 <p>以上より、看護技術論を前提に開発した本システムは、看護技術教育における教育方法として有用であると言える。そして、システム開発においては、前提とする教授-学習論の明確化、目的に向かう強い意志と情熱、それらを情報の共有とともにチームで共有・協働していくことが不可欠である。</p>			

平成 22 年 3 月 30 日

宮崎県立看護大学大学院

研究科長 薄井 坦子 様

学位論文 (博士) 審査委員

氏名 (自署) 山岸 仁美

氏名 (自署) 大名 明裕子

氏名 (自署) 浅野 昌亮

氏名 (自署) 長鶴 美佐子

学位論文審査結果報告書

このたび、審査委員会として学位論文 (博士) の審査を終了したので、その結果について下記のとおり報告します。

記

氏名	栗原保子	
審査結果	学位論文	合格
論文題目	看護学生の自己評価能力向上のための ネットワーク型CAI<学習支援システム>の開発に関する研究	
審査要旨	<p>本研究は、看護技術論を土台にしたCAIの10年にわたる構築過程を浮き彫りにし、教育実践とその評価を通してシステムの有用性を示したものである。特に、<自己評価能力向上支援システム>は、自己の行為を看護観とその表現技術の連関で自己評価を促すという点において、独自性を高く評価された。このシステムの特徴は、三方向からのビデオ映像により自己モニタリングできる機能にあり、グループ学習や到達レベルに達しなかった学生達の個別指導に取り入れ、学生が自覚していなかった行為を対象の反応と重ねて意味付け、部分ではなく看護過程としての自己評価ができるようになるという変化をもたらしていた。これらは、時代とともに変化する学生特性に応じて、看護実践能力の向上に不可欠な自己評価力を高める上での新たな教育方法として、さらに個別指導の充実に向けて学生数の増加にも対応しうる汎用性のあるシステムであるという点からも、看護学上価値ある研究と認められた。</p> <p>各システムの関連性を構造的に示した図ネットワーク型CAI<学習支援システム>について、さらに詳しい論述が加わることで、本研究の独自性がより明確になると考える。</p>	